

同じ出来事にふたつの顔 ?

フランス語を学んでいて習得が特に難しいと思えるポイントが3つある。「冠詞の使い方」、条件法・接続法などの「法の意味」、それから複合過去と半過去の使い分けに代表される「時制の用法」である。私自身、これらのポイントについて何か分かった気がした教師になってからのことだ。よくよく眺めてみると、この3つのポイントには共通点があることに気づく。それはどれも「話し手による事物・出来事の捉え方」に関係しているという点である。

「捉え方」とは何か。「犬」は *chien* という単語で表わす。これは語彙の問題で捉え方には関係しない。捉え方が変われば *chat* 「猫」と表現するなどということはない。雨が降っていたら *Il pleut.* と言う。別な捉え方というのは、あまり考えられない。雨は雨なのであり、雪ではないのである。ところが冠詞の場合、同じコーヒーが *Je bois du café.* 「私はコーヒーを飲む」と部分冠詞を取ることも、*Je prends un café.* 「私はコーヒーを注文する」と不定冠詞を取ることもあり変幻自在である。液体飲料としてのコーヒーと捉えているか、それとも喫茶店で注文する1人分のコーヒーと捉えているかによって冠詞が変わる。法についても同じで、直説法の *Il y a eu un accident dans le quartier.* 「近所で事故があった」と、条件法の *Il y aurait eu un accident dans le quartier.* 「近所で事故があったみたいだ」の伝える意味のちがいには、出来事の捉え方が直接的(確信あり)か、間接的(確信なし)かが関わっている。

これと同じことが時制についても言える。

- (1) *Tu as dit* que tu n'aimais pas l'avion. 「飛行機が嫌いだと言いましたね」
(2) *Tu disais* que tu n'aimais pas l'avion. 「飛行機が嫌いだという話でしたよね」

«*Je n'aime pas l'avion.*» 「飛行機が嫌いだ」という相手の発言を取り上げて間接話法で表現するとき、*tu as dit* と複合過去にすることも、*tu disais* と半過去にすることもできる。相手の発言という出来事はひとつである。ところがこれを複合過去でも半過去でも表わすことができる。これは何を意味するか。時制の使い方は出来事によって決まるのではないということである。

私たちは「過去の出来事だから過去形で表わす」とか、「未来のことだから未来形を使う」と単純に考えがちである。しかしそんなことはない。過去の出来事でも、*Il aura manqué le train.* 「彼はきっと電車に乗り遅れたにちがいない」と前未来形で表わすこともあり、未来のことでも *Attends. J'ai vite fini.* 「待って。すぐに終わるから」と複合過去形で表わすこともある。

これを冠詞の使い方と比較すると、同じコーヒーに部分冠詞 *du* をつけて「数えら

れないもの」とすることも、不定冠詞 un をつけて「数えられるもの」とすることもできるのとよく似ている。初心者はよく、「犬」の呼び方は chien ひとつしかないのと同じように、「出来事の表わし方もひとつに決まる」と思いこみがちだ。だから上の(1)(2)のような例を見ると、どう考えていいのかわからなくなる。(1)(2)は同じ出来事について*異なる捉え方*をしたものであり、そのちがいはちょっと凝って見た日本語訳から感じていただきたい。(1)の後では「じゃあ、新幹線で行くことにしましょう」などと会話が続けることが予想される。(2)の後では「でもどうしてもそんなに飛行機が嫌いなんですか」などと話題を蒸し返すことが予想される。この差についてはまた改めて詳しくお話する。

このように、時制は「出来事の捉え方」に深く関わるため、「隠れたしくみ」の宝庫で、学習者にとっては地雷原のようなものだ。時制の問題をすべて扱うことはできないが、いくつか重要なポイントを取り上げてお話することにしよう。

「点の過去」と「線の過去」って本当？

最初に複合過去と半過去の使い分けを取り上げよう。最初に習う過去時制であり、日常会話でもよく使われる時制であるにもかかわらず、これがひと筋縄ではいかない。初級レベルで最もむずかしい点のひとつだとさえ思っている。

教科書でよく見られる説明は次のようなものだろう。複合過去は、「時間軸の上で点で表わされるような出来事を述べ、英語の現在完了のように現在の状態・経験を表わすこともある」と書いてある。(3)が「点の過去」、(4)が「現在の状態」、(5)が「過去の経験」の例である。

(3) *J'ai rencontré une jolie blonde hier.* 「昨日、美人のプロンド娘に出会った」

(4) *Maman est sortie.* 「ママは出かけています」

(5) *J'ai été en France trois fois.* 「フランスには3回行ったことがある」

一方、半過去については、「過去のある時点における状態や継続中の動作を表わし、時間軸上では線で表わされる」などと書かれているものが多い。(6)は到着の時点を取ってみると「家はもぬけの空だった」という状態、(7)では台所に入った時点において「マリーがコーヒーを淹れる」という動作が続いている。いずれも典型的な半過去の用法とされるもので、複合過去と入れ替えることはできない。

(6) *Quand nous sommes arrivés, la maison était déserte.*

「私たちが到着した時、家はもぬけの空だった」

(7) *Il est entré dans la cuisine. Marie préparait du café.*

「彼は台所に入って行った。マリーはコーヒーを淹れているところだった」

しかし、「点の過去」「線の過去」とか、半過去が「動作の持続・継続」を表す

という教科書的説明は、誤解を生みやすい。mourir「死ぬ」や tomber「倒れる」のように瞬間的な出来事は「点」で描けるので複合過去に、attendre「待つ」や dormir「眠る」のようにある程度の時間続く出来事は「線」で描けるので半過去にするという誤解である。しかし、動詞の表している意味そのものが「瞬間的」か「持続的」かは、複合過去と半過去の選択には関係ない。どの動詞もどちらの時制にも置くことができる。次の例のように瞬間的動作を表す動詞を半過去にすると、「～するところだった」という意味になるのがふつうである。

(8) Quand je suis arrivé à l'hôpital, Jean mourait.

「私が病院に着いたとき、ジャンは瀕死の状態だった」

(9) Elle tombait quand je l'ai prise par la main.

「私が腕を支えたとき、彼女は倒れるところだった」

一方、attendre「待つ」のような持続的動詞もまた、J'ai attendu. も J'attendais. も可能なのだが、持続時間を表す (pendant) une heure「1時間のあいだ」などの語句をつけると半過去に置くことができない。

(10) × J'attendais le bus (pendant) une heure. 「私はバスを1時間待った」

(11) × Nous dansions toute la nuit. 「私たちはひと晩中踊り続けた」

「待つ」動作は1時間続き、「踊る」動作はひと晩続いたのだから、時間軸上では点でなく線で描くだろう。だから半過去にしますという訳だが、これまたよく見かける誤解なのである。複合過去にするか半過去にするかは、動作の物理的な持続時間とは関係ない。「点の過去」「線の過去」と言うよりは、教科書は次の点を強調すべきだろう。半過去は始まりと終わりがはっきりしている「完結的」出来事ではなく、始まりと終わりがはっきりしない「非完結的」出来事を表す。完結的出来事を表すのは複合過去の方なので、(10)は J'ai attendu、(11)は Nous avons dansé になる。たとえ10年間続こうとも、始まりと終わりが確定している「完結的」出来事は、あたかも点であるかのごとく複合過去で表す。

かくのごとく半過去の「線の過去」という言い方は誤解が多い。私は教科書から追放した方がよいとすら考えている。半過去にとってはむしろ、開始点と終了点がおぼろという点が肝心なのだ。(7)を例に取ると、半過去が表わしているのは、彼が台所に入って行った時点において、「彼の目にはマリーがコーヒーを淹れている姿が見えた」ということだけである。いつコーヒーを淹れ始めたのかは問題にしないし、いつ淹れ終わるのかもわからない。「見たら、コーヒーを淹れていた」というのが半過去の意味のすべてである。

時制は出来事をどう見るか

冠詞の話をしていたとき、「文章のなかの冠詞をすべて消して、元の冠詞を復元するようにフランス人に頼んだら、果たしてすべて元どおり復元できるか」という問題を出したことを、忠実な読者ならば記憶しておられるだろう。答は「できない」であった。時制についても同じことが言える。出来事が1分で終わってしまったのか、それとも3時間続いたのかという「コトの論理」でどの時制を使うかが決まるのならば、「文章のなかの動詞をすべて不定形にして、元の時制に戻すようにフランス人に頼んだら、果たしてすべて元どおりにできるか」の答は「できる」になるはずだ。しかし、(1)(2)の例からわかるように、同じひとつの出来事を複合過去でも半過去でも表せるのだから、答はもちろん「できない」なのである。なぜなら時制の使い分けは、出来事を話し手が*どのように見るか*で決まるからである。これが「コトバの論理」である。言語のなかに「コトの論理」をそのまま持ち込んではいけない。「コトバの論理」で考えなくてはならない。

教室ならばここで不満の声があがるだろう。「先生、そんなこと言われても困ります。見方によって決まるのなら予測できないことになり、手掛かりがなくなるじゃないですか」はいはい、その通りですね。だからこそ、「ここで半過去にしているのは、このような見方の結果なのですよ」という説明が必要なのである。これについては次回お話することにしよう。 (とうごう・ゆうじ)